

中国・珠江デルタにおける順徳（Shunde）の 歴史的 position に関する諸問題

上 田 慧

はじめに—珠江デルタ・順徳研究の歴史的意義—

- I. 珠江デルタの養蚕・絹業地域をめぐる方法論的諸問題
 - II. 珠江デルタの「蚕基鱼塘」システム
 - III. 順徳の郷紳的土地所有制—珠江デルタのジェントリー—
 - IV. 順徳発展の歴史的背景と伝統文化
 - V. 順徳における器械製糸工業の発展
 - VI. 順徳の発展と製糸業民族資本の形成
 - VII. 順徳における民族資本の形成と再編
- おわりに—中国市場経済の歴史的基盤—

はじめに

——珠江デルタ・順徳研究の歴史的意義——

中国の驚異的な経済成長を支える「世界の工場」として、広東省・珠江デルタへの関心が高まっている。しかし、珠江デルタ東岸に位置する香港—深圳—東莞の急速な産業発展にたいして、西岸内陸地域の経済発展はほとんど注目されていない。なかでも仏山市順徳（Shunde）は、家電と家具・花卉園芸では世界最大の産業集積地となっているが、その包括的研究は皆無に等しい¹。

珠江デルタは、かつて中国最大の養蚕地域であり、中国近代化の歴史的舞台でもあった。筆者は、家電を中心とした順徳の企業群を「順徳企業群」、順徳人特有のビジネスマインドを「順徳マインド」と表現したが、そこに順徳特有の歴史的背景を直感したからに他ならない²。1910年代には「広東銀行」とよばれ、上海や天津と競うほどの商業

-
- 1 順徳の土地面積は 806 km²、人口約 110 万人（外来人口 40 万人）である。ちなみに京都市の面積は 610 km² である。2002 年に、禅城区、南海区、高明区、三水区とともに、仏山市の 5 つの区として併合された。世帯当りの自動車保有台数は中国 1 位（100 世帯に 26 台）であり、比較的民富の蓄積が顕著であると思われる。外資企業数は 2004 年現在約 1300 社を数えるが、日系企業数は 25 社にすぎず在住日本人も 70 人にすぎない（喜多忠文「中国珠江デルタと『順徳』の急成長—現地でのビジネス経験を通じて—」同志社大学『ワールドワイドビジネスレビュー』第 7 巻第 1 号、2005 年 8 月号所収参照）。
 - 2 最近の順徳の集中調査に全面的な協力を頂いている深圳市中日経済文化交流促進会理事何厚平氏、順徳政府区長周天明氏、にたいし改めて感謝申し上げたい。なお、これまでの調査・研究成果は以下の論考を参照されたい。上田 慧「中国・珠江デルタにおける経済的統合と競争—広東省・順徳（Shunde）における家電産業の集積—」同志社大学『ワールドワイドビジネスレビュー』第 5 巻第 1 号所収、2003/

と金融の繁栄をみた順徳とは、どのような歴史的背景を持つ地域なのであろうか。

本稿では、順徳の養蚕・製糸業発展の歴史的意義について考察する。現地調査で感じたことであるが、順徳ほど、伝統文化を尊重し、地域開発との調和に留意している都市は少ない。「蚕基魚塘」という生態農法はもとより、清朝 10 大名園のひとつ「清暉園」や広東省最大の寺院（宝林寺）がある。また、多くの華僑を世界に送り出し、「自梳女」・「金蘭契」などの社会現象を生じさせた地域でもある。このような社会現象がなぜ順徳に生じたのか。また、珠江デルタにおける経済発展とどのような関連があるのであろうか。

以上のような問題関心から、本稿では、第 1 に、珠江デルタにおける養蚕地域の歴史的な位置づけについて、蘇耀昌 (Alvin Y. So) 氏の「世界システムのアプローチ」による分析を手掛かりに、考察を深めたい。第 2 に、順徳における養蚕・絹業の生成・発展過程の考察に焦点を絞り込み、その世界史的な位置づけについて考察する。本稿は、珠江デルタの産業集積の解明に向けた順徳の「定点観測法」確立のための準備的考察であり、2005 年 5 月、日本学術振興会科学研究費（基盤研究 C）に採択された個人研究「中国・珠江デルタにおける産業集積の特性分析—順徳の定点観測を中心に—」の成果である。

I. 珠江デルタの養蚕・絹業地域をめぐる方法論的諸問題

1. 蘇耀昌氏の世界システムのアプローチ

蘇耀昌 (Alvin Y. So) 氏は、「単一作物型輸出志向地域は、世界システムの観点から地域史に適用可能な完璧なケース」として、養蚕業に専門化した華南地域に着目している。「地域研究の世界システムの観点とは、世界システムへの編入 (incorporation)・農業の商業化・工業化・プロレタリア化そして周期的発展 (cyclical development) という、世界システムの動態と地域の動態の発展との緊密な相互作用を強調するものである³」。とくに、方法論的には「社会的階層分析 (social classes analysis)」を重視する。筆者も、従来の中国地主制研究の見直し、地主層分解、農民層分解がもたらす多彩な地域諸階層の分析が必要と考える。また、「世界システムへの編入 (組込み)」については、15 世紀末から 16 世紀初頭の「大航海時代」の到来により、初めて「世界市場」が生み出され、産業革命の前提となる「商業革命」という世界史的諸条件が創出されたことを

3 年 7 月、同「中国・珠江デルタにおける順徳企業群の形成と発展—その歴史的背景と美的集団—」『同志社商学』第 56 巻第 1 号所収、2004 年 5 月、同「国境経済圏と輸出加工方式—メキシコのマキラドローラと珠江デルタの広東システム—」大阪市立大学経営学会『経営研究』第 55 巻第 2 号所収、2004 年 7 月。

3 Alvin Y. So, *South China Silk District: Local Historical Transformation and World-System Theory*, State University of New York Press, 1986, p. 22.

想起させる。「世界システム」論は、あたかも世界を鳥瞰するような視点から、各国・各地域の世界史的相互連関を強調する。しかし、「世界システム」それ自体の独自の発展論理を認めるところから、地域特有の発展論理との整合性の点で有効か否か、こうした点が問われている。

本稿では、以上の「世界市場」との関連や、阿片戦争（1840–42年）以降、1911年の辛亥革命へと連なる中国近代史の論争的諸問題については、必要な限り触れることにし、順徳における養蚕・絹業の発展が持つ歴史的意義について対象を限定して考察することにする。

蘇氏によれば、華南の絹業地域は、「経済の活動が完全に国際市場に関連づけられたごく少数の農村」である。「1920年代初頭に、華南3大絹業地域（順徳、南海、香山）は129万3000ムー（403平方マイル）の桑園を持ち、養蚕（sericulture）には総計約200万人が従事し、年間で、3100万担（1担=133.9ポンド=約60kg）の桑葉、44万4000担の繭、8万8000担の生糸を産み出し、最盛期には45の蚕卵市、36の繭市、18の生糸市があり、160釜の蒸気繰糸機械が採用されていた⁴。このような養蚕・絹業地域に関する従来の研究成果について、以下のように整理している。

第1は、人類（民族）学的な研究であり、Freedman（1966⁵）は、「宗族・氏族」・血縁組織による共有地の所有、地域共同体の防衛・築堤・水利補修など多くの機能を解明している。第2に、「20世紀初頭における宗族組織の崩壊と地主階級の暴力的な搾取」に焦点をあてたChen（1973⁶）の研究がある。第3に、「氏族共同体の強力な家父長的権威に抵抗する婦人」による「不婚運動（marriage resistance movement）」の研究である（Topley, 1975；Sankar, 1987⁷）。こうした女性を「自梳女」とよぶが、後に詳しく紹介する。第4に、絹業地域への英国の侵攻に対する国家主義的な抵抗の研究がある（Wakeman, 1966⁸）。阿片戦争（1840–42年）中の「平英団事件」のような抵抗運動が1850年代初頭の太平天国の乱に転換していく原因等について考察している。第5に、中国初の器械制工場が華南・絹業地域に設立された要因の研究である。なぜ「生糸生産のために蒸気繰糸方法を用いた中国最初の工場が、上海や広東のような先進都市ではなく、絹業地域の一農村に存在した⁹」のか。Eng（1978）の知見のほか、Chan（1975¹⁰）は慈善団体

4 *Ibid.*, p. 17.

5 Maurice Freedman, *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung*, London, Athlone, 1966.

6 Chen Han-seng, *Landlord and peasant in China*, Westport, CT: Hyperion, 1973.

7 Marjorie Topley, "Marriage Resistance in Rural Kwangtung." in Margery Wolf and Roxane Witke (ed.) *Women in Chinese Society*, Stanford: Stanford University, 1975, Andrea P. Sankar, *The Evolution of Sisterhood in Traditional Chinese Society*, Ph. D. Dissertation, University of Michigan, 1978, pp. 57–58.

8 Frederick Wakeman, *Strangers at the Gate: Social Disorder in South China, 1839–1861*, Berkeley and Los Angeles: University of California, 1966.

9 Robert Y. Eng, *Imperialism and the Chinese Economy: The Canton and Shanghai Silk Industry, 1861–1932*, Ph. D. Dissertation, University of California, Berkeley., 1978.

と絹業資本家階級との結合について興味深い考察を行っている。最後に、絹業地域の経済が1929年大不況期に崩壊した要因の研究である。Lin (1979)¹¹は絹業地域の農村工業に対する外国資本主義の破壊的な影響について考察している。

蘇氏は、上記の中国研究は、個々の論点を解明しているとはいえ、「過去数世紀の華南絹業地域の歴史的発展を論ずることに失敗」し、あまりにも学術専門領域の極端な細分化に陥っていると批判し、華南絹業地域における上記の諸問題は、「資本主義的世界システムの文脈の中で新しい意味を」獲得できるという。蘇氏の議論の特徴は、封建制解体から資本主義までの過渡期の多様性を重視するため、封建制に代わり、世界システムへの「組入れ(編入)」以前の「前期資本主義 (precapitalism)」という社会形成概念を提起し、地主からはある程度自由な独立農民の存在を重視する (Anderson, 1974)¹²。

この点は、華南の大土地所有制と農民層分解の評価にかかわる研究課題である。蘇氏は、前期資本主義においては、気候、土壌、作物などの生態系的な要因が強く影響するという。珠江デルタは、平均16℃から最高37℃の温暖な気候であり、面積は1万2000km² (2900平方マイル)で、水位が低いために7、8月には度々洪水・氾濫に襲われた。このような自然的・地理的条件が養蚕地域の生成・発展にどのように影響しているのであろうか。

2. 堤防建設と沙田のエンクロージャー

珠江デルタの西岸地域は、唐代から上流の肥沃な沖積土が河口に運ばれ、秦と漢の時代には年間10-20メートル、唐と宋の時代以降は、年間20-30メートル、平原を海へと拡大した。順徳の地域は、約1200年前の唐の時代には島に等しく、洪水を繰り返しながら堆積された新たな沙洲の開発をめぐり、囲基(堤防)建設競争が引き起こされた。しかしその境界は洪水の度ごとに曖昧になり、絶えず「境界係争問題」が生じた。例えば、順徳では、1796-1949年間に合計137回、実に12年に平均1回の大洪水が記録されている。「郷紳達は、お互いに、相手の囲基の作りすぎが洪水を引き起こした原因だと非難」し¹³、沙洲の開拓と占有をめぐる抗争の中から、順徳等に居住する地主・有力者の郷紳による華南特有の郷紳的土地所有体制が形成されたのである。

蘇氏はこれを「囲基(堤防)建設 (embankment-building) と沙田(干拓地)エンクロージャー (polder farm enclosure)」問題とよぶ。このような抗争は、宗族集団間の抗争

10 Wellington K. Chan, "Merchant Organizations in Late Imperial China", *Journal of Hong Kong Branch of Royal Asiatic Society* 15: 28-42, 1975.

11 Alfred H.Y. Lin, "The Agrarian Crisis in pre-Communist China: The Case of Kwangtung Province", in Lee Ngok and Leung Chi-keung (ed.) *China: Development and Challenge*, Hong Kong: University of Hong Kong, 1979, pp. 85-116.

12 Alvin Y. So, *op. cit.*, p. 30 参照。

13 *Ibid.*, p. 44.

第1図 珠江デルタの沙田



出所：Alvin Y. So, *South China Silk District: Local Historical Transformation and World-System Theory*, State Univ. of New York Press, 1986, p. 43.

と同盟の形をとるが、その頂点に立つ大地主は、初期に沙田を占有した階級である。大地主は、所有する沙田を各々 2000 ムーほどに分割し、通常 5-10 年の契約で他の少数の農民に貸与し、そこからさらに他の農民に賃貸されたため、「第 2、第 3 階層の地主」が生まれた。借地農は、直接の徭役義務を外されたので、その負担は二重三重に最終の直接生産者に転嫁された。大地主の宗族は同姓の男系親族全体を指し、異姓・小姓をも吸収して大姓村落を形成する。沙田の開発はきわめてリスクなため、地主層が労働力として雇ったのが、珠江流域で漁業・水運などで生計を立てていた約 30 万人の水上生活者（流民）であった。その多くは少数民族で、収穫の 70% をも地代として収める小作関係を地主と結んだ。彼らはどの宗族にも属することができず、互いに孤立し、定住せず休閑期には流民に戻ったのである。こうして中国でも特有の重層的な地主制（*multilayer landlord system*）が形成されたのである。¹⁴

II. 珠江デルタの「蚕基魚塘」システム

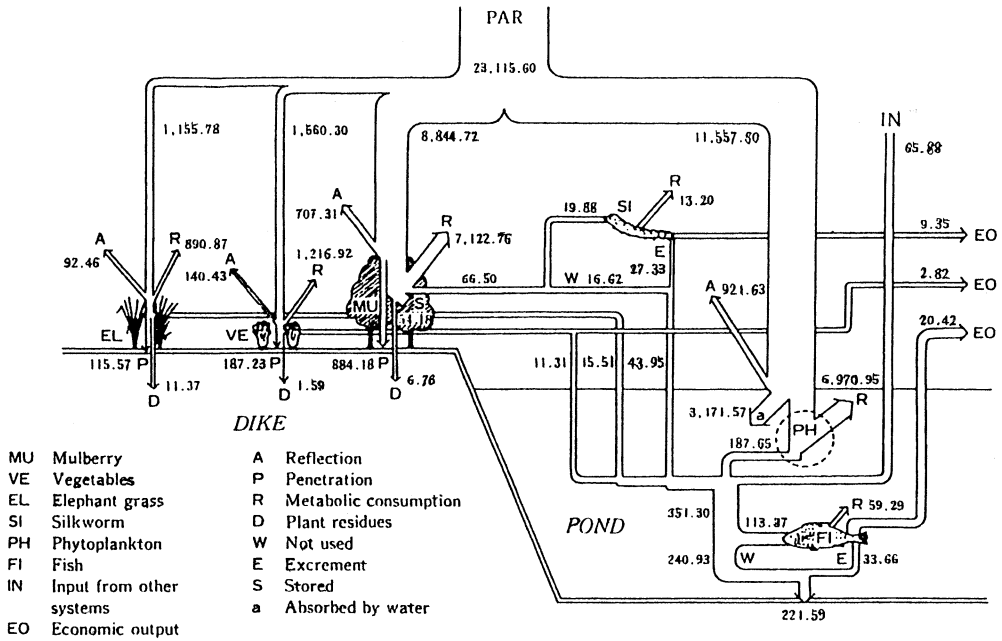
1. 「果基魚塘」と「蚕基魚塘」の生態農法

順徳は、秦の時代に南海郡の番禺県が管轄した。前漢時代、宣帝は、趙陀を南越王として冊封し、南越王国はヴェトナム北部まで勢力を拡大したが、紀元前 111 年、漢の武帝により滅ぼされた。隋朝以降は、南海県の管轄下にあった。宋の徽宗 2-5（1103-1106）年頃、「北方から南下した漢民族が大量に増え、労働力を充足し、最新の生産技術を流入させ、県地域の多くの土地が開墾されて農業は大いに発展した」という。¹⁵

14 以上は、*Ibid.*, p. 51 参照。

15 順徳市地方志編纂委員会編『順徳縣志』(第 4 編 経済綜述 第 1 章 経済発展 第 1 節)中華書局, 1996 年参照。

第2図 順徳での蚕基魚塘システムのエネルギーフロー (the dike-pond system)



出所：Kenneth Ruddle and Zhong Gongfu, *Integrated agriculture-aquaculture in South China: the dike-pond system of the Zhujiang delta*, Cambridge University Press, 1987, p. 81.

順徳の物産は豊かであり、明の景泰3年4月27日(1452年5月16日)、「順天明徳(天に順し徳を明す)」の意味を取り、南海県の一部が「順徳県」と名づけられた。『順徳縣志』には、「并逐步形成果基魚塘和桑基魚塘的生产结构。明中叶后，资本主义萌芽在珠江三角洲开始生长，本丝的专业性商品农业也得到逐步发展」とある。明中葉以後の專業的農業商品經濟化に「資本主義の萌芽」を見るか否かは、最近の「資本主義萌芽」論争から見て議論のあるところであるが、「果基魚塘和桑基魚塘的生产」は順徳に特有のものである。

順徳では、稲米のほか甘蔗(サトウキビ)・龍眼・荔枝(レイシ)・香蕉(バナナ)などの栽培、花卉・園芸、淡水魚養殖、養蚕などが今でも盛んである。宋代から、龍江と龍山あたりで、浅瀬を利用して魚の養殖池を作り、基台(堤)に果樹や桑樹を栽培する「基塘農業」が発展した。それは、基台に果樹・穀物のほか、桑木を植えて蚕を飼い、飼料として死蚕、屑繭等を魚の養分として池に投入する。12月頃、養分に富んだ池の泥を桑木の根にかけて、桑は茂り、蚕は桑の葉を旺盛に食し、多量の繭を生んだ。桑園が気温・水温を保ち、空気を清新にし、生物繁殖にとって有利な条件を形成する「良性生態自然農法」である。約600年前から行われてきたこの基塘農法システム(the dike-pond system)は、環境を根本的に変える大規模土木工事でなく、エネルギーフローか

16 同上書，第4編經濟綜述 第1章經濟發展 第2節参照。

らみてきわめて有効な自然循環生態農法であることを実証した研究がある（Kenneth Ruddle and Zhong Gongfu, 1987¹⁷）。詳細は省くが、第2図に、その計測を原図で示しておく。

魚塘（池）と基台（堤）との比率を対水対基というが、「四水六基」は、区画面積の10分の6を土地とし、後を池とすることにより、珠江の洪水を防ぐ治水事業としてもきわめて有効であった。順徳に特有の農法であり、明の時代に成熟したが、「世界に稀な人工生態系」と「農業の商品経済化」を同時に生み出したのである。このような治水事業を行うだけでも、大土地所有者による相当な財力と労力の投入、そして広域にわたる村落共同体の統率力・支配力が必要なことは容易に理解できるであろう。

2. 世界的養蚕・絹業地帯としての順徳の発展

澳門（マカオ）が1517年にポルトガルに占領されて後、中国・日本・マニラと欧州を結ぶ交易が盛んになり、国際市場では蚕・生糸・絹織物への需要が急激に高まった。これにより順徳の桑栽培と蚕糸生産が促進された。明の万暦年間（1573–1619年）、桑蚕産業は順徳の農業生産の中で第2位に上昇し、「蚕基魚塘」の発展により、順徳は中国の商品経済化でもっとも先行した地域となった。

順徳の大良・陳村・北滘などは果実生産基地としても著名となり、「陳村の花々は続々と咲いて広州に至り、広州花卉市場の重要な商品の仕入れ先になった」。「清代になると、花卉市場は絶えず拡大し、陳村は園芸中心として発展した」。順徳の陳村は、いまでも世界最大の花卉・園芸団地として栄え、錦鯉や鰻の養殖が盛んである。明の万暦9（1581）年、順徳県には、魚塘が4万84ムー（2672.3 ha）あり、珠江デルタ養魚池総数の25%を占めた。崇禎15（1642）年に、桑木栽培面積が5万8094ムー（3869ヘクタール）に達した。明代には、桑園囲等堤防で囲まれた輪中集落が20カ所を数え、清末には87となり、順徳全土に宗族的な輪中集落が分布したのである¹⁸。

清の乾隆24（1759）年、清朝は「海禁」政策の徹底により、広州だけを唯一の対外貿易港とした。このような「広東システム」はほぼ60年間続くのであるが、海外の商人が広州に集まり、生糸と絹織物を大量に仕入れるようになった。したがって、順徳は、広州・マカオを積出港とする「海上シルクロードの起点」となったのである。こうした世界的ニーズの急増に対応して、順徳では、畑地・稲田の桑園への転換が急速にすすんだ。道光初年（1821年）、龍山、龍江あたりにはすでに稲田がなくなり、阿片戦争の頃から「蚕基魚塘」が基盤の目のように一帯を覆った。果基魚塘の大部分は蚕基魚塘

17 Kenneth Ruddle and Zhong Gongfu, *Integrated agriculture-aquaculture in South China: the dike-pond system of the Zhujiang delta*, Cambridge University Press, 1987.

18 『順徳縣志』第4編経済綜述、第1章経済発展—第3節（2）参照。

に転換されたのである。このように養蚕・絹業に専門化された順徳の土地所有・生産関係はどのようなものであったのか。以下、わが国における中国近代史研究の成果を参考に、考察する。

Ⅲ. 順徳の郷紳的土地所有制

——珠江デルタのジェントリ——

1. 郷紳の大土地所有制の成立

蘇氏は、「中国の封建秩序は17世紀の農民闘争とその後の国家によって破壊され」、地主層は徐々に歴史の舞台から消えたことにより、「分割地所有農民の社会的形成がみられた」。しかし、華南では、地主は強固な宗族組織を持って反撃した。地主は科挙登用試験に宗族関係を利用し、清朝・官僚と癒着して、沙田や富を占有し、傭兵や労働力を支配できる種々の特権を手に入れた、という¹⁹。清朝後期には、紳士層の階層分化と同族結合の弛緩がすすんだ華北・華中に対して、珠江デルタは宗族・同族結合が強固な大土地所有制が特徴であった。

「清朝の強靱性の根拠」を問うた西川喜久子氏は、「順徳県は、県内地主の所有沙田の広大さにおいて他県を圧倒しており、祠堂、族田が多いという点」に着目し、ここに「清朝権力の基盤を解明する手がかり」があるという²⁰。順徳を網の目のように流れる水郷を制御し、寄生地主として所有する桑園や、蚕基魚塘を守るための治水事業や管理は、当時の地方支配層にとって地域統治権力を誇示するためにも必須の課題であった。

「郷紳 (ジェントリ)」は、科挙制度に合格した官僚経験者の「紳」と官僚予備軍の「士」からなる紳士のうち、郷里に大土地を所有した富裕な有力地主・地方支配層である。科挙を受験できるのは財力のある地主層が多いので、郷紳・地主層は一体化し、牙行などの問屋・高利貸商人を含め、明・清代に、「郷紳支配」型大土地所有制が成立したのである。²¹

このような郷紳研究は江南地域に片寄りがちであったが、松田吉郎氏が珠江デルタの郷紳支配について論争を整理している。今堀誠二氏は、清代に3種の「共同体」が推転を遂げ、農佃の中から富農と貧農の階級分化を招来し、富農が辛亥革命 (1911年) によって絶対主義政権を樹立したと主張する。これにたいして、佐々木正哉氏は、共同体は単一であり、沙田の占取及び囲築に際しては、初発から郷紳が介入する機会が多く、紳士が現実的な地方権力を握る契機となったものは、既成の郷村の外部へ流出した貧民

19 Alvin Y. So, *op. cit.*, p. 156 参照。

20 西川喜久子「順徳団連総局の成立」『東洋文化研究所紀要』105, 1998年1月, 284ページ。

21 Microsoft® Encarta® Reference Library 2003 参照。

集団からの脅威である、と主張する²²。

以上の両説に対し、松田吉郎氏は、珠江デルタにおいて「同族村落を主要な形態とした村落共同体が広汎に存在し」、それを含んだ地域支配を行うのが郷紳であり、郷紳及び士人に賦与された優先特権を艇子として、「経済的基盤及び経済外強制権の確立」、
「共同体的諸機能（水利・相互扶助・村落内裁判・防衛など）の把握支配と諸共同体間の調停権の獲得」、
「国家権力からの在地支配権（主として、徴税・警察・裁判権）の分与」、以上の3要素がその順序で、郷紳権力が確立された、と主張する。珠江デルタの沙田占有競争は、「土地所有における重層的関係（寄荘戸－業戸・佃戸）を生み出す要因」となり、嘉靖21（1542）年頃には「寄荘戸の半数以上を順徳県が占めており」、
「郷紳が同族結合を利用し、流民等の労働力を投下して行った沙田開発→所有（占沙・寄荘等）→広汎な地域的諸生産（蚕民の蠶養殖等）支配という過程が見られた²³」という。

2. 珠江デルタの養蚕・製糸業の成立基盤

西村孝夫氏によれば、明代末期に、江蘇・浙江一帯（長江デルタ）に産する「湖糸」の直接生産者は、原則的には広汎な佃戸（農奴的小作人）層であり、零細化した農民が家計補充のための手段として積極的に養蚕・製糸・絹織を営んだ²⁴。珠江デルタでは、零細な佃戸（小作農）と並んで都市の不在地主（業主・寄荘戸）より桑田を借入れる蚕戸・佃戸・雇農のほか、中流養蚕家と報告された小作農業戸が農業労働者に耕作させていることが注目されよう²⁵。

柴三九男氏は、業戸など「中農的養蚕農家から発展した農村機業の成立は、その基礎を漁塘桑園経営にもっていた」とされる²⁶。魚塘を利用し、桑葉の収穫を高めることができた要因としては、養蚕を6～8回程度行える広東特有の「多化蚕」の存在と関係している。「多化蚕」は「全く稀に見る特色」といわれる。蘇浙両省の白繭・土糸と異なり、「六化蚕」を例に取れば、筐色で稀に濃黄あり、光沢は佳良で紡錘形であるという²⁷。

生糸が中国の主要輸出品目の太宗をなしながらも、フランス・イタリア等の絹織物向

22 今堀誠二「清代における農村機構の近代化について」（『歴史学研究』191・192号、1956年）。佐々木正哉「順徳県郷紳と東海十六沙」（『近代中国研究』第3輯、1959年所収）参照。なお、順徳の村落については、片山 剛「清末・民国期、珠江デルタ順徳県の集落と『村』の領域—旧中国村落の再検討へ向けて」（『東洋文化』通号76、1996年1月参照）。松田吉郎「明末清初広東珠江デルタの沙田開発と郷紳支配の形成過程」（『社会経済史学』第46巻第6号、1981年3月、55ページ参照（同氏著『明清時代華南地域史研究』汲古書院、2002年、第1章31-81ページに収録）。

23 松田吉郎、前掲論文、56、69、80-81ページ参照。

24 西村孝夫『近代イギリス東洋貿易史の研究』風間書房、1972年、78-79ページ参照。

25 鈴木智夫「清・民初における民族資本の展開過程—広東の生糸業について—」（東京教育大学アジア史研究会『中国近代化の社会構造—辛亥革命の史的位置—』教育書籍、1960年8月所収、65ページ参照（鈴木智夫『洋務運動の研究』汲古書院、1992年、第3章②収録）。以下、第1論文とする。

26 柴三九男「清末広東三角州の養蚕経営と農村近代化—東洋的社会と『魚塘』」（『史観』57・58号、1960年4月、所収参照）。

27 東亜研究所『支那蚕糸業研究』大阪屋號書店、1943年、103-105ページ参照。

けの「土糸による湖糸」生産に特化した長江デルタの江蘇・浙江地域に対して、珠江デルタは、アメリカ絹織物工業にとっては、きわめて安価で重要な原料糸＝「器械糸」生産に特化したのである。世界的な生糸需要の増大は、順徳における零細農業の経営様式を一変させた。長江デルタと異なり、生計補充的な家内工業としての繰糸工程は分離され、その担い手の婦人たちも繰糸女工＝大量の製糸労働者として器械製糸工場に吸収された。²⁸ 郷紳的大土地所有の下で、宗族村落に住む多数の婦人製糸労働者の出現は資本主義的な生産関係を生み出す一条件となった。また、清朝末期の動乱期に、地主・郷紳層に変化が見られた。「張之洞など有力官僚による改革の動きが起こり、科挙の廃止(1905年)や変法による立憲制をめざしたが実現されず、各省の郷紳層を基盤として、反清朝・反満州の風潮が強まった。この滅満興漢の革命運動の中心が孫文であり」三民主義を主張したのである。²⁹ このような繰糸女工の大量の出現、郷紳地主の多様性は、順徳特有の社会現象を生み出した。次に、何厚平氏の協力を得て実施した現地調査を織り交ぜて、順徳特有の伝統文化を紹介しよう。

IV. 順徳発展の歴史的背景と伝統文化

1. 「清暉園」・古村、杏壇鎮・逢簡村を訪ねて

(1) 順徳出身の郷紳層と著名な文化人

郷紳・地主による宗族集団支配のもとで、順徳では、科擧の合格者が多く、また受験を促進する風土は多数の知識人層を生んだ。宋の時代の倫教人である張鎮子が状元（国家試験首席）になってから、清末に科擧が廃止されるまで、順徳から、実に、文武状元4名、文進士318名、武進士111名が生まれた。宋から清末まで、中央朝廷の宰輔も含め、上層部役人になったのは30名、詩人、画家、学者、教育家などの著名な文化人は75名、その他、各分野で全国的に影響のある人物が140名ほど現われていた。宋の末ごろ、中国の児童啓蒙教育の有名なテキスト『三字経』の著者も順徳人の区適子であった。また、清の中ころの仇巨川（?～1800年）著『羊城古鈔』計9冊も、珠江デルタの慣習の変遷を示した貴重な書物である。清の同治12（1873）年、順徳人の梁敦彦と曹嘉祥二が清朝初めての国家留学生（32名）として、アメリカへ留学し、2人とも、8年後に帰国し、政府役人として活躍した。

28 鈴木智夫氏は、「なお足機マニユは順徳県容奇にかなりあり」、[このマニユの出現は光緒末のことで、機械製糸がもはや不動になった時に、機械製糸の刺激の下にはじめて出現したもので] その逆ではないことを力説されている（鈴木智夫、前掲第1論文、47ページ参照）。

29 松丸道雄・池田 温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編『中国史5』世界歴史体系、山川出版社、2002年、43ページ。

(2) 清朝 10 大名園「清暉園」

順徳・大良鎮の清暉路に広大華麗な庭園を残す清朝 10 大名園「清暉園」と龍一族との関係について触れておきたい。同園の最初の所有者である黄士俊は、宰輔（副総理大臣）にまで上りつめた人物であるが、順徳では、正直で汚職を憎む「順徳人」として英雄視されている。明の万歴 35（1607）年、科擧の状元となったが、明の大奸臣とされる魏忠賢の汚職・腐敗に不満を持って 2 度辞職し、里帰りした 1621 年に、黄は大良の南郊外に黄家祠、天章閣、靈阿閣を建造した。2 年後、すでに礼部右侍郎まで昇格した黄は、魏忠賢一派と袂を分かち、官を辞め、その新築家屋に住み込んだのである。その邸宅は、100 年後、清の乾隆年間に、進士龍応時が購入した。龍応時はその庭園を 2 人の息子、龍廷槐と龍廷梓に分け与えた。息子の龍廷槐が 39 才のころ、科擧の進士に合格し、父親の病死後、庭園の中央部を建て直し、母親を住ませた。その庭園は同年の進士である李兆洛によって「春暉」と名づけられた。その意味は、「誰か寸草の心が言えるか、三春の暉を報じる」から、「春暉」の意を取り、母親への恩返し of 気持を表したという。龍氏の最後の庭園の持主である龍渚恵が、蘇州など中国江南名園の精粹を調査・吸収し、改築して名を「清暉園」と改めたのである。

「清暉園」は、庭園面積が 2 万 2000 m² で、北京の故宮の庭園と異なり、30 数幢の建物を 8 エリアに分け、互いに独立させて、回廊、小橋、造山、植木などにより、巧みに一体感を出している。各建築物の様相はそれぞれ異なり、回廊の屋根先、木柱、石柱、門などに中国の伝統的な彫刻で物語を表現している。園内には池が数か所あり、小さな滝や噴水で池を活かしている。園内の建造物は 380 年余の歴史をもつが、多数の花模様 of ステンド・ガラスを使っている。その図案と色彩は、まことに驚くべき多彩な色合いからなっている。当時、ガラスは貴重品で、大半は、イタリア、フランスからの輸入品であるが、順徳の職人の手によって中国的な図案・絵を書いて加工したものであり、その技術水準は、かなりのものであったと推察できる。順徳の各鎮には、「清暉園」ほどではないが、古い庭園と、数百年の歴史をもつ塔が数多くある。

(3) 中国の古村、杏壇鎮・逢簡村にて

順徳の杏壇鎮にある逢簡村は、華南の水郷のある典型的な小橋のある閑静な古村である。西漢（約 2000 年前）の時代から、高度の農業が発達し、南宋（800 年前）の頃、中原（江南）の移民が戦争を避けるため、多数ここへ移住した地域である。清の中頃以降、逢簡では、水運、桑蚕業が盛んになり、清末には、人口が 1 万人以上に達し、3 か所の生糸市場が存在し、300 台あまりの紡織機械を用いて 1500 人あまりが働いていた。「小広州」と言われた所以である。経済の発展とともに文化も繁栄し、この小さい古村から、多くの進士、擧人が生まれた。多くの高官と富豪は、家族を誇る「祠堂」を 78 幢ほど造り、37 の橋をかけ、32 軒の「廟宇」を建てた。その一部は今も保存されて

いる。とりわけ、宋の時代、逢簡の人李修仕によって建てられた巨済橋と明遠橋はそのまゝ、古代の面影を残している。居合わせた当地の古老の案内により、橋にかかる欄干の獅子の口から石の玉が持ち去られ、近辺の木造住宅が焼き討ちされ、寺院の礎石が畑に投げ捨てられた跡を目の当たりにし、かつての文化大革命の打撃の大きさを実感した。

以上のように、江南からの移住者の存在、郷紳と宗族村落の遺跡、器械製糸業の興隆など、これまで述べてきた順徳の歴史の縮図のような古村である。この一帯を順徳の重要な歴史的遺産として引き続き保存に努め、実証的研究が深められるよう念願する。

2. 「自梳女」と「金蘭契」—封建夫権に抵抗する順徳の婦人たち—

中国の民俗学者においては、順徳に「自梳女」とよばれる不婚運動があったことはよく知られている。『順徳縣志』では、「烈女」と称され、「蚕織、供養翁姑、訓撫孤児」とあり、また「家又貧、紡績佐之」、「不嫁、紡績以養父母」、「夫亡勤織」などと指摘されるように、養蚕・製糸・紡績との関連性が指摘されている。均安鎮のジーンズ工業団地など順徳における繊維・アパレル産業の発展はこうした歴史的背景と関連している。

成田静香氏の最新の研究では、「家の経済がよくても自梳女になることがある」ケースとして、順徳の龍家（清暉園所有）は、「その家の女性たちに対し多くの財産を与えたほか、大良に華麗な家を見て、自婆同士で集まって住めるようにした」という³⁰。

順徳南方の均安鎮・沙頭村の「ひょうぎよく氷玉堂」は、シンガポールへ行った「自梳女」たちの寄付により、1951年に完成された2階建ての建物である。我々の見解によれば、「自梳女」とは、明代の中頃以降、順徳の「桑基魚塘」を基盤とした商品経済の発展が「操糸女工」という階層を造り出し、自立意識をもった若い女性とその当時の封建的夫権社会に対する反発で生まれた「結婚しない決意をした女性」を指すのであり、たんなる未婚の女性ではない。

以下の慣習は殆ど知られていないのでやや詳しく述べよう。何厚平氏によれば、「自梳女」は、そう決意すれば、一定の行事を行う。まず、「黄皮」という珠江デルタ地域の特別な果物の木の葉を水に入れて、湯を沸かしておき、それで風呂に入り、清潔な身のままで、新しい服を着て、新しい靴をはいたあと、各「自梳女」に正式儀礼を行なう。経済的な余裕があれば、宴を用意し、「自梳女」たちを招待する。その日から「自梳女」になり、一生涯、後悔してはならないものとされている。「自梳女」は平日、仲間たちと一緒に住んでもいいし、実家へ戻ってもよい。従来の仕事をつづけて、自立生活を送るようになり、時折、「姑婆屋」に行つて「自梳女」たちと社交を行なうことが

30 成田静香「自梳女の家—広東の婚姻文化—」関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』東方書店、2004年、209-226ページ参照。

できる。最後は実家で死んではいけない慣わしがあるので、「姑婆屋」へ移住し、そこで亡くなるという。沙頭村だけで清朝末期には200～300人の「自梳女」が出て、1929年大恐慌による経済危機の影響で「自梳女」の大量の失業者のほとんどが一斉にシンガポールに向かった、という。

私が沙頭村政府の案内で、聞き取り調査した自梳女の1人は、83才で、12才の頃ほかの「自梳女」たちとシンガポールへ行き、72才の頃に郷里へ戻り定住したという。今でも、生存している「自梳女」たちが村の自宅に住み、時々「冰玉堂」で行事を行なう。「厨房」には薪を積み上げ、集団生活が十分可能な炉があり、野菜が植えられた小さな畑と小奇麗な中庭があり、木造の2階には幾つかの壁で仕切られた質素な寝室兼用の部屋がある。老女は、私の福祉助成の質問に答えて、驚くほど自立心の強い、誇りさえ感じられた返答があった。1階奥には自梳女たちの位牌を祭ったお堂がある。そこは同じ思いを共有した自梳女たちの礼拝の場である。「自梳女」という現象は、民国に入って非常に盛んになり、順徳全地域で数千人の「自梳女」がいたという。広東の肇慶市の1か所を除き、他の地域では見られない社会現象となった。

また、ふたりの自梳女が共に生活するための婚約のことを「金蘭契」と言う。例えば、「金蘭契」を結んだ女性が親の強制で男の嫁になっても、夫の家に行かず、「金蘭契」の相手と生活していくのである。「金蘭契」の「自梳女」は老後、財産を養女に継承させて面倒を見てもらい、その養女も、その後女性の友を招いて「金蘭契」を結び、世代継続していく。

こうした社会現象は、欧米の女性解放運動とは異なるが、「宗族」が同一祖先の「男系」の親族からなる同族集団であることからみても、「烈女」と称された順徳女性の封建夫権・男権に抗する「女性自立意識の芽ばえ」であり、中国女性の苦しい人生の選択の一つであったと判断するに留めたい。

V. 順徳における器械製糸工業の発展

1. 順徳における民族資本の形成と絹織物工業との対抗

珠江デルタの歴史的位置に関するもっとも有力な評価は、鈴木智夫氏による次の文言に表れている。「広東製糸業こそ、清末の中国社会を端的に具現した民族資本であり、かかる諸事実は珠江デルタの歴史的諸条件として、その後の中国近代史の展開の上に様々な形をとって発現していったのである」³¹と。

阿片戦争の1841年、広東陥落後のイギリス兵の攻略にたいし、広州西北近郊の郷紳は、100余郷の民衆からなる反英組織＝平英団を結成し、三元里でイギリス軍を攻囲し

31 鈴木智夫、前掲第1論文、51ページ参照。

た(平英団事件)。咸豊7(1857)年、英仏連合軍の広州攻撃にたいし、南海・番禺両県の知県と紳士達が音頭をとって、広州府下14県の紳士を結集し、順徳の羅・龍・蘇3氏も、皇帝から「団練を組織して、兵勇と協同で英仏軍を広州城から駆逐せよ」との命を受け行動した。太平天国の乱(1851-1864年)の指導者、洪秀全は、広東省花県の客家出身であり、郷紳・地主・団練と対立したが、天地会(三合会)系の民衆運動は各地の抗租運動を吸収しつつあった。植民地化の脅威と、清朝の重税にたいする不満は、珠江デルタの社会的諸階層の多彩な潮流を生み出したのである。

南海県、簡村塗簡村の人、陳啓沅は、1872年、地元で中国初の蒸気機関を用いた新しい器械製糸工場を建設した。通説では、近代中国における初の民族資本主義の台頭を示すものとされている。陳は咸豊4(1854)年以来、ベトナムにあってフランスの製糸器械などの調査により、「汽機之学」を求め、新機をつくり、「小資本家経営」に徹した。『蚕桑譜』『陳啓沅算学』などを著し「少孤貧、篤学」とされ、仕官を願わない嶺南の「新農夫」を自認することにより、中国初の産業資本家と言われたのである。同治13(1874)年には、順徳にも最初の器械製糸工場が龍山に設立され、1878年には「南海順徳で百数十家がそれを始めた³⁵」という。

しかし、陳啓沅による民族資本主義的産業資本の「下からの道」は、広東の宗族的郷紳支配下において、零細小作農(佃戸)による家内副業的な蚕糸業とそれを原料糸とする在来絹織物手工業との対立を激化させた。その頂点は、1881年、南海県西樵の裕厚昌糸廠襲撃事件であった。鈴木智夫氏は、その暴動の主体を「南海県西樵地方大嵩壇周辺の『機房工人』、つまり絹織物手工業者・絹織手工業労働者」と断定している。「製糸工場が大量の繭を買いあさり、在来糸の価格の高騰を招いたこと」をあげて、「フランスやアメリカの絹織業の原料糸のみを生産する広東の近代的製糸業は、在来糸を原料として国内向けや輸出用の絹織物を生産する広東の絹織手工業者や絹織手工業労働者にとって、その生存を脅かす恐るべき存在であった³⁶」という。暴動は短期間に鎮圧され、製糸工場は閉鎖された。南海の製糸業は衰退し、陳啓沅は、翌年、継昌隆糸廠をマカオに移した。こうして、近代的民族工業の本格的な形成は、その萌芽がみられた南海に代わっ

32 西川喜久子「順徳団練総局の成立」『東洋文化研究所紀要』通号105、1988年1月、286-287ページ参照。

33 前田勝太郎「辛亥革命前の広東における民衆闘争—農民を主体として—」『歴史学研究』423号、1975年8月所収、2-6、11-12ページ参照。

34 しかし、曾田三郎氏の研究によれば、陳啓沅の継昌隆糸廠の創設年は1872年ではなく操業を開始した1874年に置くべきであり、規模は女工600-700人という大きなものではなかったこと、この工場のボイラーは動力用ではなく、「煮繭用の蒸気を出すためのものであり、繰糸枠は人力、すなわち足踏の動作に頼っていた」という批判が生じているようである(曾田三郎『中国近代製糸業史の研究』汲古書院、1994年、55-56ページ)。

35 柴三九男、前掲論文、29-24ページ参照。

36 鈴木智夫「中国における近代工業の形成と洋務派—広東製糸業の成立過程を中心に—」『歴史学研究』第540号、1985年4月、45ページ。以下、第2論文とする。また、津久井弘光「糸廠襲撃事件をめぐって—清末広東省南海県蚕糸業の展開—」『日本大学史学会研究彙報』通号3、1959年10月参照。

て、他ならぬ順徳における器械製糸工業の発展によって可能となったのである。

例えば1917年当時、「製糸業は三角洲地方最盛にして順徳県を第一とし南海県番禺県三水県之に次ぐ」、「産糸中の器械糸は主として輸出に仕向けられ、又手車・足踏車にて繰糸せるものは土産絹織物の原糸として使用せらるる³⁷」という。生糸は、①器械製糸工場で生産した輸出向けの「器械糸」、②地元絹織物の原料糸＝土糸とに大別された。後者の②を仕入れる「絹織工場は大規模のもの少く殆ど家内工業に属し、（略一筆者）品質粗悪³⁸」であるが、「広東省城及び仏山には斯くの如き絹織物工場多く其の製品は品質において江浙品に及ばずと雖も其の産額は多額に上り地方的需要に應ずる外安南暹羅海峡植民地瓜哇スマトラ等に居留する支那人用として輸出せらるるもの尠からず³⁹」という。広州及び仏山の零細家内工業による絹織物は、質的には長江の江浙品に劣るため、地方の需要や東南アジアの華僑向けに限られていたのである。

これに対して、①の「器械糸」生産に特化した「順徳県下を最として南海・番禺県下に製糸工場頗る多く其の規模は700、800釜を有するを以て大とし、小は100釜乃至50釜を以て、操業するものも尠からず。而も、製糸家は、多く其の資力薄弱にして錢莊または生糸売込商より資金の融通を受けつつあるが、一旦出水による桑田の被害天候による繭質の不良、亦は、欧米財界の変動による糸価の崩落等に会すれば、其の倒産頻々たるを見ること其の例尠からず⁴⁰」という。以上は、順徳を中心とする1917年頃の製糸工場について、平均して資本不足の経営が多く、「錢莊または生糸売込商」への金融依存、洪水・気候などの自然条件や、欧米の生糸市場に左右されやすく、不安定な経営状況におかれていたことを物語っている。

2. 順徳の器械製糸工業の特質

『順徳縣志』によれば、順徳では「器械糸の価格が手工業の土糸より30%－60%も高くなったために、手工業と対立⁴¹」した。原始的な家内手工業生産による土糸の劣位は明らかであるが、19世紀の欧米絹織物工業の原料糸として、弾力性に富み、器械生産に適合する生糸の合理的な規格統一が厳しく要求された。上海など長江デルタに先行し、蒸気機関を採用した珠江デルタの多化蚕による器械糸がこれに適合したのである。

同治13（1874）年、順徳にも器械繰糸工場が生まれた。生糸の品質が向上し、価格も高騰し、県域に、再度桑園栽培ブームを呼び起した。光緒年間（1875－1908年）に、

37 『大阪毎日新聞』1919（大正8）年7月29日－8月2日参照。

38 同上紙参照。

39 野尻 生「南支那に留意せよ（1～11）」『大阪毎日新聞』1917（大正6）年8月9日－1917年8月21日付参照。

40 同上紙参照。

41 『順徳縣志』第4編経済綜述、第1章経済発展－第2節（4）参照。

養魚池は10万ムー、植桑面積は30万ムー（1万9980ha）に達し、清の光緒末（1908）年頃まで、順徳県内では、稲などの農耕地が総耕地面積の僅か10%を占めるだけであり、米の生産高が僅か15日分しか充足できず、近辺または広西省から毎年、500万両白銀の米を購入したのである。

光緒13（1887）年には42あった器械製糸工場は、宣統3（1911）年には142工場に達した。1890年代以降、順徳の繰糸工場が広東省の9割以上となり、製糸女子労働者は6万人以上を数えた、その数は、当時の上海（5万人）と天津（5000人）の産業労働者総計を上回るほどであった。総人口でも、順徳は1909年135万6000人と上海（1910年、128万5000人）を上回った。順徳は、「南国の絲都」とよばれ、広東あるいは世界における養蚕・製糸業の主要基地となったのである。

かくして「広東の器械糸は、20世紀の初頭以降、中国輸出貿易の筆頭の地位を占め、長年にわたって中国器械糸の首位の座を独占し中国の絹製品輸出の第1位を占めた⁴²」。器械糸への世界的需要の増大は、「手工業から器械制工業への発展」を促進した。それでは、なぜ、民族資本主義の萌芽がみられた南海県に代って、順徳において器械製糸業が急速に発展したのであろうか。こうした研究史上の大論点に対して、鈴木智夫氏は、「はなはだ理解に苦しむことであるが」、「(1) 順徳県では当時絹織手工業が南海県ほど発達しておらず、絹織手工業者・絹織手工業労働者の力が南海県のそれとは比較にならないほど弱かったこと、(2) 製糸工場を開設した『紳耆』の勢威が絶大で、地方当局もかれらの意向に反して製糸工場を閉鎖に追い込むような措置をとりにくかったこと⁴³」、珠江デルタにおける蚕糸業の革新は、「19世紀の70年代初頭というかなり早い時期から土着資本の手で全く下から行なわれていたこと、それは当初広東特有の同姓村落に君臨する『紳耆』の在地における勢威に依拠し、地方当局の干渉・介入を排除する形で推進された⁴⁴」と、指摘されている。ここでは、「土着資本」による「下からの道」は、単独では展開できず、「同姓村落に君臨する」郷紳の指導者「紳耆」の勢威に依拠する所に、順徳における民族資本的製糸業発展の特殊性を認められていると理解したい。

Ⅵ. 順徳の発展と製糸業民族資本の形成

1. 「広東商業界」の覇権確立

日本と中国の製糸業は、1905-9年にはじめて世界生糸市場における両国の地位が顛

42 鈴木智夫、前掲第1論文、54ページ参照。

43 鈴木智夫『洋務運動の研究』汲古書院、1992年、430-431ページ参照。

44 同上書、637ページ参照。

倒した。清朝は、上海を中心に洋務派による官営の機械工場、軍事工場を育成し、「上からの工業化」をすすめた。珠江デルタの養蚕地域は、江浙糸による絹織物の輸出を伸ばしつつある上海・長江デルタとの競争が激化し、同時に日本生糸・日本紡績業の重大な挑戦を受けることになったのである。

第1次大戦前の広東製糸業は、「上海と異なって外商は製糸金融に介入しておらず、銭荘（銭舗）、富豪、生糸売込商といった、中国の金融機関、資産家、生糸商が融資の担い手」であり、「民族工業としての性格の強さを示している」とみられる⁴⁵。邱捷氏は、19世紀末から20世紀初めにかけて、商団団長に就任した參伯著らをはじめ「絹織物商人は広東商業界の盟主となった」とし、辛亥革命後にも「絹織物商や銀号商の多くは生糸の主要産地の順徳県人であった」という⁴⁶。第1次大戦後においても、「新式の銀行よりは在来の金融機関である『銀号』の役割の重要性」を強調し、「銀号の経営者として最も活躍しているのは、広東の製糸業の中心地の一つである順徳県の出身者であり、全体の8割の銀号は製糸金融を主な業務としていた」⁴⁷。広東省では、養蚕家は繭市場で仲買人の「販家」に買い取られ「繭棧」に持ち込むがそれは製糸家の経営に属し、繭市場450の半数は順徳県にあった⁴⁸。1920年代後半においても、「広州の売込商の結束力の強さ」が目立ち、「売込商である糸荘が製糸金融に活躍」しているが、「個々の糸荘の関連工場として複数の製糸工場がグループをなしている」例もあると指摘している⁴⁹。

19世紀後半、洋務派による外国資本に依存した「上からの」官僚的工業化をすすめる江浙地方と異なり、前期的商業資本としての絹織物商にくわえ、糸行等問屋・高利貸資本、銀号（銀行）などの諸利害を通じて、製糸業に利害をもつ順徳の郷紳・地主・商人が「広東商業界の盟主となった」。つまり前期的商業資本と順徳の郷紳地主制との融合による「順徳人の覇権」と見られるわけである。だが1920年代までの広東商業界の変遷には、歴史的な段階差がある。以下、この点を解明するために、広東の民族資本の発展過程について考えてみよう。

陳啓沅によって開始された民族的器械製糸業は、当初の個人経営・独資という企業形態から、工場規模の拡大により、出資者を拡大し、地縁的な「合股」形態が採用された。この間、生糸売込商・銀号など高利貸商人に従属し、産業資本としての技術革新が長期に停滞したことは、アメリカ絹織物業界から再三にわたって品質改善のための技術改良を求められたことによっても明らかである。しかし、南海県裕厚昌糸廠襲撃事件の

45 曾田三郎、前掲書、219ページ。

46 邱捷著、小西高弘訳「辛亥革命以前、広東における資本主義の発展について」『福岡大学経済学論叢』34（2・3）、1989年12月、9ページ参照。

47 曾田三郎、前掲書、220-221ページ。

48 東亜研究所、前掲書、116ページ参照。

49 曾田三郎、前掲書、148ページ。

後、「洋務派」の工業政策は「1882年秋に」「一大転換をとげ、民族資本・民間資本の存在を容認するものへと変化した」とする鈴木智夫氏の見解に依拠すれば、民族資本的製糸業の「下からの道」をどのように理解すべきであろうか。⁵⁰

2. 広東の「新しいジェントリ・マーチャント」と金融利害

蘇氏は、当時の現地新聞が「伝統的な地主・商人＝郷商, the traditional gentry-merchants) のイメージに合わない伝記」を記載していることから、「新しい地主・商人 (ジェントリ・マーチャント: the new gentry-merchants)」や「父親の死で没落した地主, ボーダーライン上の地主」の出現に着目している。「進士や科挙に合格して郷紳になる道への希望を断念し、商人になるために他の地域に行き、財をなしてから故郷に戻った事例」など、こうした「新しいジェントリ・マーチャント」が一定の知識を持ち、地元共同体に適した外国の機械技術の改良など、新しいタイプの社会階層＝「新しい資本家階級」を形成したという。この典型例が、華僑商人の陳啓沅であることは明らかである。「新しい地主・商人」の組織は、「広東における9つの慈善ホール (the Nine Charitable Halls at Canton)」という「新しい資本家階級がビジネスを論じるための会合所」を提供した。蘇氏は、1920年代後半でさえ、新しい資本家階級が自らの関心を行使するためには他の階級のサポートなしにはできなかったという。20世紀初頭に「製糸業は、国内の絹織物工業の発展を促し、銀行や流通業の普及、養蚕に関連した多数のサービス業の急成長を促した」という。⁵¹

そのような傾向は果たして順徳においてどのように展開したのであろうか。

第1次世界大戦後、世界の物資・原料が欠乏し、生糸の価格も、民国4 (1915) 年から11年まで4倍に急騰した。順徳は、桑を栽培する面積が広東省の栽培面積の43.2%となり、蚕の生産量が広東省の48.4%を占めた。世界生糸価格の高騰により、民国9-18 (1920-29) 年の10年間は、順徳の最盛期であった。その特徴としては、第1に、順徳の蒸気機関による製糸工業は135工場あり、全省の80.83%を占めた。工場規模は拡大し、部品下請工場は、集約生産のため大部分順徳に在った。第2に、順徳は広東省の蚕糸業の中心地・集散地になった。広東省の各製糸工場は、全て順徳に18ほどの繭の買付機関を設立した。第3に、桑と蚕、生糸の年間の生産額は、広東省総額の半分近くを占めた。蚕糸業の繁栄とともに、順徳の商業・交通運送業・サービス業・金融業も繁栄した。金融業は、広東省全県で毎年1億元 (銀元) 以上の通貨の回転を必要としたが、「多くの銀行の所有者は製糸業の所有者でもあった」。両替商は44社あり、デルタの民間為替両替店総数の65.2%を占めた。

50 鈴木智夫, 前掲第1論文, 52ページ参照。

51 以上は, Alvin Y So, *op. cit.*, pp. 224-116 参照。

こうして、順徳の金融利害と広州の金融利害とは密接に関係し、多くの為替両替店は広州の銀行の系列店であった。「広州の50%の銀行家と55%の金融業者は、順徳を出自とする」というように、順徳の器械製糸工業の1920年代のブームは、珠江デルタの諸資本の利害を合一した。中華民国建設の動乱期に、広東省の中心都市広州の金融利権＝広東実業界の覇権を確立したのは、大手器械製糸業者主導の下に、順徳の地主・郷紳・富豪・売込商・問屋商人であった。順徳それ自体が「広東銀行」とよばれた所以である。⁵²

Ⅶ. 順徳における民族資本の形成と再編

1. 順徳における中国民族資本家の群像

1911年の辛亥革命を契機とした中国の近代化に際して、順徳人はどのような対応をしたのであろうか。なお、孫文は隣町の香山（中山）出身であり、「戊辰変法」・「維新変法」（1898年）を唱えた康有為は広東省南海県出身、弟子の梁啓超も新会県出身であり、李鴻章（洋務派）の政敵両江総督張之洞も同地出身であった。清末に、かつて順徳の寄生地主が寄荘戸として支配した香山など周辺地域からこうした歴史上の人材が輩出したことも皮肉である。⁵³

孫文の「興中会」創設への協力者、尤列（1865～1936年）は、順徳北水郷新基坊の人である。長期に孫中山の秘書をつとめた陳友仁（1878～1944年）は、海外生まれの順徳人であった。順徳簡岸村人の簡朝亮（1852～1933年）は、康有為の同窓であり、広東で著名な学者・教育家であった。康有為の弟子、順徳の麦孟華（1874～1915年）は維新立憲の新聞雑誌の主幹であり、「公車上書と戊戌変法」に参加した人物である。

清朝後半以降、順徳では、商品経済が目覚しく発展する中で、発明家、実業家、投資家が生まれたことも注目すべきことである。温子紹（1833～1907年）は、龍山郷の人で朝廷上層官僚、郷紳の家柄であったが、幼い頃から西洋機械技術に興味をもち、同治12（1873）年、広東と広西の軍事装備機器局の総弁に就任した。設計と製造に精通した同氏の下に開設された産業技術者トレーニング・クラスの卒業生は、清末と民国初頭の、広東省近代産業発展のメインチームを構成していたのである。

52 『順徳縣志』第4編経済綜述、第1章経済発展－第2節（6）－1参照。

53 香港が生んだ世界的映画俳優ブルース・リー（Bruce Lee, 李小龍）の父、李海泉は順徳人で広東劇の名優であった。1940年に米国で生まれたブルース・李は香港で成長し、児童役のスターとして20本の映画に出演した。19歳で渡米し、ワシントン大学に入学し、哲学を専攻した。その後、彼自ら「咏春拳法」を創出し「截拳道」と名づけて、ハリウッドで「功夫の映画」に出演したあと、中国人のイメージを一新させようと「功夫」という言葉を世界的な用語に広げた。今回、順徳のブルース・李研究会副会長黄徳超氏との会談で「ブルース・李記念館」を順徳に新たに建設するほか、「ブルース・李功夫学校」を設立する計画があることを知った。

岑国華 (1886～1942年) は、葛岸西村の人で、1919年、広東省で最初に、日本の新製繰糸機器を採用し、生産性と品質を高めた。また、株式を発行し、順徳の勸流、大良、容奇、楽従、南海の官山、沙頭などの地域に展開し、傘下の繰糸工場は18社となった。従業員別に工場をみると、500～800人の大規模工場まであり、総人員約1万人を雇用した当時世界有数の巨大企業となった。

楽従鎮大敦村で福縁社を結成した、何老一、何洵南、何茂三、何呂勤の何氏家族は、第1次世界大戦の頃、順徳の龍江、倫敦、桂州、大都、また、南海の大歴、官山、吉利、南莊、賀豊、西樵、湾頭、石湾などの地域に、合わせて20数社の繰糸工場を設立した。従業員400～600人規模の工場、総数1万人以上の集団化企業組織となっていた。簡東浦 (1888～1963年) は、連村の人で、若いころ日本留学をした後、日本の横浜正金銀行と万国銀行に勤めた後、1918年には200万香港ドルを集め、香港東亜銀行を開設した。香港東亜銀行は、現在でも、香港メインバンクの1社で、国際的な銀行になっている。

とくに、薛広森は、順徳の近代的先進性を示している。19世紀末、大良、容奇、楽従では、スチームエンジンを製造するメーカーが設立され、次第に、製糸機械の供給地となった。順徳随一の民族資本家とよばれる龍江美里坊の人、薛広森 (1865～1943年) は、清末に、繰糸機械のメンテナンス工場を営み、民国初年、協同和機器工場を設け、初めての中国製重油エンジンを製造した人物である。同時に、海運業も経営し、精米工場、そして、当時華南最大の製紙工場である綿遠紙工場を買収し、製糸工場を数十社経営した。広東近代工業の代表人物の一人であった。⁵⁴

なお、何一族は、広州で、永泰隆糸莊と永泰隆洋行を設立して流通分野に参入し、各国と貿易を行った。当時、製糸業界トップの地位にあり1920年代末には、一族から広州商会の会長に選ばれたのである。

こうしてみると、辛亥革命後の20世紀初頭に、順徳において、保守的な古い郷紳・地主支配の系譜とは異なる、中小地主・郷紳層による「新しいジェントリ・マーチャント層」の台頭を見出すことができまいか。そして、1920年代の未曾有の生糸需要ブームを契機に、順徳の器械製糸業は、技術改良と資本の集積・集中・グループ化を経て、広東実業・金融界の頂点に立ち、流通・貿易支配に至る民族的産業資本・商業資本、そして金融資本への典型的発展への道を見出すことができないであろうか。

2. 1920年代の養蚕ブーム

当時の順徳・南海の両県は、世界最大の製糸工場地帯であり、工場数も200近くに達

54 王忍之総編・招汝基主編『順徳県史』新編中国伏秀地方志簡本、方志出版社、1999年。38-41ページ参照。

第1表 中国の絹生産高推定値（1000担）

省	1875年	1898年	1918年	1925年	1927年	
	絹	繭	繭	繭	繭	絹
浙江	63.5	1,017	877	1,000	1,140	89
江蘇	21.2	350	267	350	545	31
安徽	0.8	30	30	30	97	6
湖北	6.1	102	100	100	123	9
四川	15.8	317	640	600	468	35
山東	1.9	45	70	60	110	8
広東	44.3	717	768	1,000	1,057	67
河南	7.8	142	—	100	43	3
その他	1.8	99	28	90	79	4
	163.2	2,819*	2,994 i	3,330*	3,662	252

出所：Robert Y. Eng, *Economic Imperialism in China: Silk Production and Exports, 1861-1932* (China Research Monograph), University of California Inst of East, 1986, p. 35.

第2表 華南の養蚕業（1923年）

地域	桑園面積（1,000 ムー）		養蚕人口	乾繭生産高（1担）	
	(A)	(B)	(A)	(A)	(B)
順徳	436.0	665.0	1,440,000	152,600	242,060
南海	297.6	300.0	200,000	83,330	96,600
香山	100.0	328.8	382,600	28,000	105,874
新会	60.0	60.0	50,000	21,000	21,840
三水	30.0	30.0	25,000	6,300	8,400
番禺	10.0	10.0	15,000	2,800	3,220
東江デルタ	28.6	28.6	25,000	8,000	8,000
西江デルタ	10.7	17.0	20,000	3,000	4,760
南西諸国	—	0.5	—	—	20
江西	—	90.0	90,000	—	25,200
	1,008.9	1,555.7	2,278,600	315,110	523,205

原典：(A) 1922 estimates by the Guangdong Experimental Station in Agriculture and Forestry from Liu Boyuan, *Guangdong canye diaocha baogaoshu* (Canton, 1922), 83-4. (B) 1923 estimates by the Canton Christian College from C. W. Howard and K. P. Buswell, *A Survey of the Silk Industry of South China* (Canton, 1925), overleaf on p. 36.

出所：Robert Y. Eng, op. cit., p. 100（一部省略）。

していた。1920年頃の最盛期に、順徳県には、紡織器械が6000台以上あり、年間の売り上げは1000万銀元であった。1918年には順徳県にも、日本の八複繰機の導入を行うとたちまちにしてデルタに普及したという（『民国順徳縣志』巻1参照）。1920年代、

順徳県が広東省の製糸工場の8割を占め、繰糸ワーカーの人数が20数万人となっていた。また、紡織、竹、木、鉄農業用具、船製造、刺繍、食品、酒造り、梳、木刻書版、タオル、爆竹、風ストーブ、錫箔、紙加工業などのワーカーを加え、産業ワーカーが30万人にも達していた。繰糸女工を含め、上海よりはるかに上まわる産業労働者階級が形成されていたのである。近代的な意味での第3次産業の販売業、運送業、金融業（錢庄）も含めると、農業商品経済に携わる人数は総人口の50万人以上となり、軽工業を基盤とするも、中国有数の近代的商業・産業集積地と言っても過言ではない。

第1表により、繭・絹生産高の推移をみると、広東省は、1920年代に先行する浙江省に肉薄している⁵⁵。第2表は、1923年頃の華南の養蚕業の概要についてAとBの試算を示したものである。

順徳養蚕業の珠江デルタにおける圧倒的位置を確認できるであろう。また、広東の養蚕人口227万8600人のうち、順徳がその半数以上の144万人である。器械糸への世界的需要の増大、婦人の低賃金繰糸労働力に依拠して、国際競争力で優位に立った広東の製糸資本家は、さらに、商業・水運・流通・金融業に進出した。繭と糸の大量販売が順徳金融業の繁栄を促進した。そのころの言葉で「一船丝运出，一船白银归（一船の生糸が去り，一船の白銀が戻る）」と言われたように、県内へ運び戻してきた銀元は最大で1日70～80万両に達していた。貨幣の流通量が毎年1億銀元以上、順徳県内の銀號（銀行）は40輔以上に達し、広州の金融業界の多くは順徳県人に握られ、資金繰りの30%が順徳県の流通に頼っていたという。順徳はかくして広東の「ウォール街」となったと言えるのである。

3. 広東製糸業の衰退とその要因

中国と日本の輸出における絹・関連製品の構成比を1886–1925年間でみると、1886–1890年に、中国が36.3%、日本が46.5%であるが、1921–1925年には各々23.4%、45.7%ととなり、中国と比較して、日本は長期にわたって約30–45%を占めている⁵⁶。「米国絹業協会の調査に依れば、全世界生糸産出額は約40万基にして、其3割8分は支那、3割5分は日本、9分は伊太利其残余は仏蘭西巴爾幹地方及び波斯等にて産出するという割合なり⁵⁷」という。1912年には、日中ほぼ拮抗するまでになっている。内田金生氏は、日本と中国の「輸出生糸の取引を通じて形成された生産者・売込問屋・輸出商社間の関係」を競争力の観点から比較している。

広東糸の輸出に際しては「糸庄と呼ばれた問屋が生糸の売込や製糸金融を主要業務

55 Robert Y. Eng, *Economic Imperialism in China: Silk Production and Exports, 1861–1932* (China Research Monograph), University of California Inst of East, 1986, p. 35.

56 Ibid., p. 13 参照。

57 『大阪新報』1912年6月14日付参照。

とし]、「ブローカーを使用しており、主としてヨーロッパの輸出商社」であった。1920年頃の順徳の売込問屋である「和誠」を例にとると、「生糸生産者（糸廠）→売込問屋（糸庄）→買弁→輸出商社」という取引ルートが一元化されていた⁵⁸。したがって、「欧米商社は情報や技術の面で生産者や生産現場、さらには販売市場と直接結びつき得なかったことが、広東糸の相対的な競争力劣位をもたらした源泉の一つ⁵⁹」であったと分析している。

見られるとおり、1882年の清朝・洋務派による民族資本容認策への転換と、1920年代の世界生糸市場における空前のブームを基盤に、器械製糸業の小資本経営から発した民族的産業資本は、旧来の「古い地主・商人」支配層の容認を受け、その保守的利害を巻き込む形で、「新しいジェントリ・マーチャント」として積極的な資本の集積と集中を展開し、金融資本に転化したのである。いわば、「順徳＝広州を枢軸とする珠江デルタの広東型金融資本」の確立を示すといえよう。中国を虎視眈々と狙う列強各国が、1920年代には産業資本から金融資本への転化を完了しているなかで、広東の金融資本はすでに民族性を失い、周辺に前近代的な小養蚕経営を残存させつつ、買弁資本・欧米の輸出商社（ブローカー）への依存を深めたのである。

器械製糸業の格差、両極分解も明らかで、1924年に、広東では、比較的規模の大きい製糸工場で広東糸が生産されているが、全体として、技術革新は停滞し、工場賃貸制度や「前近代的な地縁、血縁を根幹とする中国固有の合夥組織⁶⁰」が多く、「少額の資金しか持たない者が短期的な利益を期待し、個人あるいは共同出資という形態で製糸経営へ参入」するので、「生糸の生産・販売の投機性が高まることになった⁶¹」。

そうした矛盾は1929年世界大恐慌後の不況により顕在化し、順徳経済は大きな打撃を受けた。民国23（1934）年に、製糸工場は大量倒産し、累積倒産23社、倒産率は82.2%に達した。28の繭行、16の為替両替店（両替商）も倒産した。民国24年の桑田面積は民国13年比で62%も減り、失業・準失業者数は10万人に達したのである。

『順徳縣志』によれば、養蚕業衰退の要因のひとつは、広東生糸の外国貿易が完全に外国商社・ブローカーの手中で操作されたことを挙げている。商社代理店は、売り値を吊り上げ、価格変動を操作し、中小蚕糸家は、国外市場の状況や用途さえ知らされず、ただ盲目的に生産させられたことが損害を大きくした。また、生糸税損は民国17-22

58 内田金生「輸出品の競争力と組織間関係－戦前期における対米生糸輸出の日中比較分析－」松本貴典編『戦前期日本の貿易と組織間関係－情報・調整・協調』新評論、1996年、243-244、246-248ページ参照。

59 同上論文、269-273ページ。1900年代後半からの広東器械糸の対米輸出が日本製糸業に与えた影響については、石井寛治「1910年前後における日本蚕糸業の構造」大塚久雄他編『資本主義の形成と発展』東京大学出版会、1968年、202ページ。清川雪彦「戦前中国の蚕糸業に関する若干の考察」（『経済研究』第26巻第3号、1975年7月参照。

60 鈴木智夫、前掲第1論文、58ページ参照。

61 内田金生、前掲論文、243ページ参照。

年に84.7%増大し、過酷な税負担、匪賊や土豪の妨害などが、蚕糸業の衰退を加速させたのである。順徳では、民国19(1930)年に、蚕基魚塘はサトウキビの基塘産業に道を譲り、1930年代に糖業はブームとなった。しかし、1931年の河川の大氾濫、1938年の日本軍侵攻、1942年の日本軍の香港占領など暗く長い空白の時代が続くことになった。

おわりに

——中国市場経済の歴史的基盤——

蘇氏によれば、「ひとたびある国が資本主義的世界システムに組み込まれると、その国の発展はかなりの程度、世界システムの動態(the world-system dynamics)によって形作られる⁶²」という。順徳の養蚕業の盛衰は、地域経済が国際分業の中に原料(糸)生産地として組み込まれ、その盛衰が世界市況に左右されるという興味深いケースを示した。

順徳は、珠江デルタの沙田開発競争をめぐり、寄生地主による郷紳の大土地所有制が成立し、宗族支配下の蚕基魚塘による農漁業の商品経済化を基盤に、民族資本的器械製糸業の形成という特異な発展を示した。考察したように、珠江デルタにおける「新しい資本家階級の形成」は、かつて「清朝の強靱性」を示し、広東特有の宗族支配で擬制された郷紳の大土地所有制の中から「新しいジェントリ・マーチャント」として紳耆などの「サポート」を受け、生糸売込商・銀行など金融利権との癒着の下に、器械製糸業を発展させるなかで急速に金融資本に転化したのである。

その好例として、ここに、中国初の民族資本家と賞賛される陳啓沅を取り上げよう。陳啓沅は、「デルタ最初の民族資本家となり、康梁の変法運動にも参画していたが、実子の陳廉伯をして粵商商団団長、広東総商会会長という華南実業界の最高の地位を獲得せしめる基礎を、この器械製糸によって築いたのであった⁶³」。陳廉伯は、絹織物業の出身であるが、のちに香港＝上海銀行頭取となり、買弁資本として広東商団を指導し、1924年には孫文に対立し武装蜂起した事実がある。この父子を通じる急速な歴史的変化をどのように理解すべきであろうか。父陳啓沅については、製糸業の民族的産業資本としての「下からの発展」を示すが、父子を通じて蒸気機関を用いた巨大器械製糸工場の急速な拡張と、流通・金融業への多角的進出という金融資本家への典型的展開が推測されよう。子の陳廉伯が、広東実業界の頂点、香港＝上海銀行頭取に就任したことがその指標である。

62 Alvin Y. So, *op. cit.*, p. 75.

63 鈴木智夫, 前掲第1論文, 47ページ。

しかし、華北・江南優位の中国研究の中で、珠江デルタとりわけ順徳における諸資本の利害についての細密な実証研究はまだ不十分である。本稿では、現地の協力の下に、順徳における特有の社会現象について触れ、さらに民族資本の形成についてその一端を示したつもりである。珠江デルタに代わって世界の生糸市場に躍り出たのは日本であった。1929年世界大恐慌と日本軍侵攻によって順徳の養蚕・絹業は崩壊した。珠江デルタによる繁栄は、その後、中国の長い激動の時代を経て、再び、「世界の工場」として復活した。

かつての蚕都のうち、珠江デルタ東岸の東莞は、世界市場のIT（情報通信）産業の浮沈に左右される「外向型経済地域」に変貌した。その不安定さは、2001年3月のIT株式市場崩落による東莞における大量失業者の発生・都市流失に現れている。これにたいして、かつて世界最大の専業的養蚕地域であった順徳は、1978年の改革・開放政策の成功例に挙げられたように、農村企業化による郷鎮企業の躍進と民営化を基盤に、均衡の取れた安定的な経済成長路線をたどっている。

かつての珠江デルタ養蚕・絹業地域に現れた、現代に通じる地域経済開発の2つの道は、いままた、珠江デルタの東岸と西岸に対照的に、世界市場の市況に左右される東莞型の「外向型発展」という「上からの道」か、農工均衡の取れた生活関連産業を基盤に躍動する田園工業都市への順徳型の「内向型発展」という「下からの道」か。中国における市場経済発展をめぐる2つの道を示している。歴史の教訓というべきであろうか。順徳のビジネスマインド、順徳企業群の成長は、家電・家具・花卉園芸では世界最大の集積地域となり、中国随一の成長性を示す地域として、「世界の工場」珠江デルタの一角にその存在感を示しているのである。